

武蔵野日曜聖書講筵

一粒の芥種子

——マタイ伝第13章31～32節——

1989年10月1日

小池辰雄

藤井武 天野貞祐 (詩) 「幼児の如く」 (母の乳房を) 神の傘下 原始核 本当にぶっ倒れませ
んか 絶対矛盾の自己同一 キリストの日傘雨傘 一粒の砂 絶対に棄てない 全身投入 霊
子核 (参考) 矛盾に於ける魂の為樂

【マタイ13】

31 また他の譬たとえを示して言いたもう 『天国は一粒の芥種からしだねのごとし、人これを取りてその畑に播まぐときは、32 万の種よろずよりも小さけれど、育ちては、他の野菜よりも大きく、樹きとなりて空の鳥きたり、其の枝に宿るほどなり』

●藤井武

私は10月1日という日は、やはり忘れることができない。これは藤井武先生の奥さんの命日なんです。藤井先生は10月1日に、そういった記念のお話をよくなさいました。また、藤井先生を記念するのも、7月14日というのが先生の命日なんです、あまり暑いものから——本当に暑い日でした。7月16日が告別式で、私は柏木の内村鑑三先生の所の集いで一席、藤井先生の話をしましたけれども——それで、藤井先生を思うのも10月1日ということ、よく矢内原先生も講演会をされた。私も藤井武記念講演会というのを多分、三、四回やりました。『別の路』という文もそうです、後で『天路』という題に直しましたけれども。

「コスモス」はまた藤井先生の奥さんの綽名あだなでもあった。先生の詩の最初に「コスモス」という言葉が出てくる。私の詩にも「コスモス」がありますけれども。著作集第十巻『聖書は大ドラマである』の324頁の『八恵福』の詩の七節に、

「恵福さいわいなるぞ 平安の

床ゆかしきすがた コスモスよ

平和を醸かもす その人は

げに神の子と 称しなえらる

とあります。私の兄貴もコスモスが好きだった。「コスモス」という言葉は「調和あるもの」ということから「宇宙」という意味をもつ。これはギリシヤ的な観念からきているわけです。



●天野貞祐

讃美歌の「主われを愛す」は天野貞祐先生が好きだった讃美歌です。天野先生が私に、

「小池君、讃美歌をうたつてくれ」

「何を歌いますか」

「『主われを愛す』を」

と。天野先生はもう命、旦夕に迫っている御病床です。

「先生、それは讃美歌のアルファでありオメガです。素晴らしい歌です」

と私は言いました、初めで終わりだと。それで、先生に何回も歌つてあげました。最後にやはり童心に帰られた。哲学的な信仰ですから、讃美歌なんかほとんど歌わない先生だったんだけれども。それが昔を思い出したんでしょうね。先生は内村先生の集會に、旧制一高の時代に、雨が降っても風が吹いても必ず本郷から柏木まで歩いて出掛けて行った。昔は本当によく歩いた。にぎり飯を持ってね。けれども、天野先生は立派な方だから、十字架が分からない。その点はやはり哲学的なんだ。

「内村鑑三は尊敬するけれども、僕は無教会は嫌いだね」

とはつきり言っていました。

とにかく、我々はいろいろなことでつくわしては、キリストの中へ入っていく。それがあります。ありがとうございます。

●(詩)「幼児の如く」(母の乳房を)

そういう歌を私は書いてある。第十巻の360頁にある「幼児の如く」(マタイ18・3)という

讃美歌(後に「母の乳房を」に改題)です。

A 19 「母の乳房を」(1980年11月26日作 讃美歌538 「すぎゆくこの世」の曲で)

1 母の乳房を 吸う児の如く

主のみ霊をば 飲みてぞ生くる

2 母がすべての おさなごの如

わが身を全く 主に投げ入れぬ

3 主のふところに 祈り入りてぞ

み霊は臨み 力に溢る

4 エン・クリストに 生くるわが身に

み霊の力 みなぎりあふる

5 み霊の流れ 脈々たれば

み民われらは 生命の泉

6 み霊の火焰 炎々たれば

何をかのぞまん 力ぞみつる



7 いざや我らは 燃ゆるみ霊を
胸中に宿し 灯を点さなん

集会が休みのときは各自、聖書身読をする。日曜日はお休みではない。各自がそれぞれの在り方で聖書を食べてください。

「我を飲め、我をくらえ」

とキリストが言われた。皆さん、キリストの言をいい加減にしたらいかんですよ。我々の信仰は観念ではないんだから。本当に聖書を読むことはキリストをくらうこと。

意味ではない。生命をいただくことです。時間は長くなっていいから、それを是非やっ

てください。それをやったら、天下無敵ですよ、そういうことになったら。私は無教会時代を、ただ空しかったとは思わないが、観念信仰時代が長すぎた。勉強はしましたけれども。

● 神の傘下

今日は「一粒の芥種子」という題です。「芥種子」の譬話です。これは第十巻でいうと「9月26日」の所です。マタイ13・31〜32、マルコ4・30〜32、ルカ13・18〜19にあります。共観福音書のどれにも出ているわけです。

31 また他の譬を示して言いたもう『天国は一粒の芥種のごとし、人これを取りてその畑に播くときは、32 万の種よりも小さけれど、育ちては、他の野菜よりも大きく、樹となりて空の鳥きたり、其の枝に宿るほどなり』

私もイスラエルで芥種を見ました。本当に小さい。ゴミみたいな、いや普通のゴミよりも小さい。だから、これを蒔いたら、いつたどこに蒔かれたか分からないでしょう。ちよつと黒い色をしています。しかし、これが3、4メートルほどの木になるそうです。

マタイ伝13章は譬話の有名なところです。キリストが譬え話をたくさん仰った。マタイ伝では「天国」という。ルカ伝では「神の国」、ヨハネ伝では「永遠の生命」という。

よく

「天国は神の支配するところ」

と註解に書いてある。そうすると、みんなそういう言い方をしている。「支配する」という言い方はかたっ苦しい。私は今度は

「神の傘下」

と書いた。神さまの傘の下に入る。神さまが傘をさしてください、その下に入る所が「天国」「神の国」である。

とにかく、福音は非常におとぎ話みたいですよ、神さまが傘をさすなんて。だから、哲学的な仏教の人は、

「神さまはお父さんだなんて、どんな鬚はやしたお父さんが天界にいるのか」



なんて言う。キリストは大胆に

「父よ」

とおっしゃる。ところが、ちつとも偶像にならない。そういう表現でもって、もの凄い霊的人格な世界に入る。まあ、一般の人には受けとれないような面があることはもう分かっていますよ。

「キリスト教はおかしい。神さまのことをお父さんなんて言っているのだから」
なんていうわけだ。

そのお父さんを本当に現したのはキリストご自身です。

「我を見し者は父を見しなり」

という。だから、私は「主さま」と言う。神さまとキリストは全く重なっている。両方も聖霊充滿の世界だから。「三位一体」というのはそういうことなんだ。何か対象的に三つならべておいて、これが一つだと言っているわけではない。「ユニテリアン」というのは、それを受けとらないで、ただ神だけにしたり、あるところはキリストだけにしてみたりする。パウロは決していわゆる観念的神学をひとつも書きません。彼の書翰の中には神学の

「ウルフォルム、根源の相」

が生きている。それをいわゆる神学に組織立てたら、もう本当はずれてしまう。だから、私は「組織神学」は嫌いだ。結局、最後はやはり文学的表現だね。おとぎ話——イソップ物語やグリム物語やアンデルセンや——あそこに限りない真理が表現されている。キリストの譬話たとえばなしがみなそうです。

●原始核

31また他の譬たとえを示して言いたもう『天国は一粒の芥種からしだねのごとし、人これを取りてその畑に播まくときは、32万の種よろずよりも小さけれど、育ちては、他の野菜よりも大きく、樹きとなりて空の鳥きたり、其の枝に宿るほどなり』

我々一人ひとり正に一粒の芥種です。この小さな芥種が3、4メートルの木になる。根をはり、芽をふきだす。これは宇宙的生命のひとつの素晴らしいサンプルなんだ。

キリストの生命はそういう生命とは質と次元がちがう。我々の肉体は御飯を食べなければ、水を飲まなければ、生きていられない。

「水」といえば、ギリシヤの哲学者のターレスが、

「万象のもととは水である」

と言った。あれは私は素晴らしいと思っっている。哲学の最初に「水」が出てきた。他の天体には水がないから生物は生じない。ところが、地球に水がある。太陽の光とのちようどよい距離に地球がある。太陽との距離がもう少し近かったらだめ、もう少し遠くてもだめ。地球は非常に太陽との距離が素晴らしいのだそうだ。この距離だから水ができて、生物が



生じた。火のような天体から水が出てくるのだから、おもしろい。本当は地球こそ水星なんだ。

「サマリヤの女との会話があるでしょ。ヤコブの井戸の水。水は沙漠の中では大変な貴いものだ。深い深い井戸だ。」

「けれども、ヤコブの水は渴くよ。私の与える水を飲む者は渴かない」

と。キリストというひとは大変な人だよ。だから、絶対にケタ違いだと言っているんです。お釈迦さんはキリストにかなうものか。私は仏教をけなしているのではない。それぞれ結構でございます。第一流の、超一流の坊さんを私は尊敬しています。如来の世界で使徒的な次元に入っているから。けれども、

「キリストは大変なひとです」

と言うよりかしようがない。やはり

「神の子」

と言うよりかしようがないのかも知れない。頭で考えて、「神の子」なんて言ってもどうにもならん。

「芥種」を見て、その木を見て、キリストはすぐ

「天国、神の国」

を連想された。あなた方一人びとりが、我々一人びとりがこの芥種でなかったらむなしというわけだ。もうそれは、原子核よりも凄いんだから。この靈的芥種は正に原始核だ。み霊をいただかなければ、この原始核には本当の意味ではなれない。靈核を持たない。だから、

「み霊を宿さざる者はキリスト者にあらず」

とパウロが言った。

●本当にぶっ倒れませんか

パウロはさんざん、聖霊の世界に反抗していた。優秀だからね、パウロというやつは。自分の優秀を誇っていたら、とんでもない間違いだった。それで、ひっくり返された。おのが義なんてものは、おのれの知識なんてものは、あてにならない。これはコリント書翰ではつきり言っている。ピリピ書でも言っている。

「そんなものは、聖霊を得てから、塵芥ちりあくたの如く思う」

と。小さくていいんですよ。むしろ、極小がいい。大宇宙と微小な原子の世界とが非常に構造的には似たものを持っているんだから、これは不思議なものだ。

本当の生命だけは神秘です。ラザロも復活したけれども、あれはまた死んだ。しかし、そろそろ腐りかかった四日目の死体に、

「ラザロよ、起き出でよー」



と言ったら、彼は起き上がってきた。大変なひとだね、キリストというひとは。本当にぶつ倒れませんか、こういう言葉を聞いて。

「参りました!」

と。

「ああ、そうですか」

「くらいではない。「参りました!」と、あの記事を読んだら、そこにぶつ倒れてくださいよ。そうしたら、本当にグーッと上から力がくるから。信仰もへったくれもない。

「私の信仰は」

なんて、何を考えているか。

どうも困るね、私はこんな言い方をするので。あなた方は誤解しないと思うけれども。いきなり教会に行つて、こんなことを言つたら、背そむいてしまふな、

「あれは少し気違いではないか」

なんて。それは気が違つているよ、普通とは。私は今、異言が出そうで困るんです、こういう境地に入つてくると。語るのが面倒臭くさくなつてしまふ。私たちは、

「そうです、私たちは聖霊をいただいたから、芥種です。十字架ですつ飛ばされてしまつたから、聖霊が入つてきました」

と言わなくては。

「でも、まだ私はこうだ」

なんて、相対的な自分を問題にしなざるな。相対的な自分を問題にしているうちは、いつまでたつても本当の世界に入れない。「南無阿弥陀仏」や「南無妙法蓮華経」よりもっと凄いではないですか、

「主さま!」

という一言は。全身だよ、全存在だよ。ただ、のどで言っているのではない。単なる心でもない。全存在が「主さま!」と叫ぶんです。俄然、力がくる——力がくるどころではない——圧倒される。

●絶対矛盾の自己同一

まだ、私はそう簡単に仆れませんから、ご安心ください。しかし、今度の詩(『エン・クリスト』40号「矛盾に於ける魂の為いらい樂」)にも書いた。

「いつなりとも、キリストが「来たれ」と仰つたら、直ちに「アーメン、ハレルヤ」

と言つて、向こう側に往きます。けれども、もう一つの仕事を終えるまでは絶対

に行きません」

という絶対矛盾の自己同一ということ。だから、活ける真理の世界はいわゆる組織神学にはならない。



パウロもペテロもヤコブもヨハネも、みな芥種一粒だ。彼らの証言が、どういうことか、聖書になってしまった。新約聖書というのは本当にむだがない。驚くべきものだね、文学としても最高ではないですか。その芥種の証言が全世界を動かしているわけだ。全世界を動かすけれども、全世界はやはり本当に動いていない。だいたいぶそちのけにしている。いつまでも聖書をただ柵の上に揚げているようだったら、21世紀はおかしくなる。21世紀のうち人類はどうかなってしまいかもしれない。

イザヤが自分の子の名を

「シエアル・ヤーシューブ」(遺れる者帰り往かん)

という名前にしたという。これは素晴らしい。神のもとに立ち帰る者が天国をつぐ。我々は、この芥種になったらば、もう、雨が降ろうが風が吹こうが、自然界の芥種と違って、霊界の芥種は本当に天国を現じていく。そして、そういう芥種の人が死ぬと、最もおそろしい力を発揮してくる。私の兄貴が私にとってそうです。

皆さん、いろいろなことでつくわしてください。それは神さまが愛し給うがゆえに、いよいよ鍛え、また本ものになしたもうから。自分の間違いを通してさえ、神さまは

「それを跳躍にしろ」

と言って励ましてくださる。だから、信仰の世界は絶対にマイナスのことはないんだ。キリストに在っては、

「これはどうも……」

なんていう世界はない。全部、大肯定で進んでいく。否定であろうと、肯定であろうと、それを本当の大肯定にしてしまう。西郷南洲が

「自分は始末のわるいやつだ」

と言った、あの始末のわるい人間になる。行き詰まりを知らない人になる。

「クリスチャンというのはそんな凄いものだぞ」

ということをどうぞ証してください。老いたるも若きも、男も女も、同じこと。これが本当に使徒的次元の信仰の世界なんです。

特に、この芥種はパレスティナの南方のむしろ暑い所に育つのだそうです。皆さんの一人びとりがこの芥種になったら凄いことです。そうしたらば、本当の伝道がおのずから成されていく。存在が伝道する。

「何かしらんが、あの人には本当の生命力があるなあ。何かしらんが、光があるなあ」

と。そして、この芥種は成長して空の鳥を宿すというのだから、どんな人をも迎えて、

「さあ、お宿りください」

ということになる。

「幸せ、幸せ」

と、よく世の中の人言うね。いわゆるマイホーム式な幸せは、そんなものはなにも幸せ



ではない。人を喜ばせ、人を助け、人を救っていくような、そういうのが本当の幸せというんです。キリストは、芥種のように天国を展開していく。

「鳥をも宿すほどに大きくなる」

というのは、その人の回りに天国が展開していくということです。

●キリストの日傘雨傘

「空の鳥きたり、其の枝に宿るほどなり」

と書いてある。キリストが我々に

「我に宿りなさい、宿りなさい」

と、ヨハネ伝15章の葡萄の樹の譬えで仰った。

「我に居れ」

という。回りに天国を展開している。神の傘、キリストの日傘雨傘の下に人を入れてやれということだ。

私は戸隠で唐傘からかさを買ってきた。戸隠の唐傘はさしていると、雨の音が非常にいい。ああいう味は、いわゆる文明の傘にはない。日本人は昔に帰った方がよさそうだな。日本人は、良い意味で非常に芸術的な民なんです、素晴らしいですよ。食物の味も、あまり加工すると逆にまずくなる。生なまのものがおいしい。

●一粒の砂

ウイリアム・ブレイクの有名な詩の一句に、

「To see a World in a grain of sand,

And a Heaven in a wild flower,

Hold Infinity in the palm of your hand,

And Eternity in an hour.”

「一粒の砂の中に世界を観る

一茎の野草に天を観る

君の手の掌に無限をつかみ

一刻の中に永遠を持つ」

とある。

「一粒の砂の中に世界を観る」

とは「芥種一粒において神の国を観る」ということだ。

「一茎の野草に天を観る」

とは、小さな野草を見て、「ああ、これが天の徴だ」と。まあ、仕方がないから、花を切つて飾りますけれども、本当は、野に咲いたまんま、崖に咲いているまんま、谷間に咲いて



いるまんま、そういう姿が一番麗しいね。

「君の掌たなごころの中に無限をつかまえる。」

一刻の中に永遠をつかまえる」

と言う。ブレイクというのは神秘的な素晴らしいひとだね。絵もブレイク独特の絵だ。ブレイクに言わせれば、

「私を見た者は宇宙を見たものだ」

というわけだ。

我々は大宇宙と一つの気持になつてしまふ。天翔あまがけてしまふ。私は人間でなければ、本当に鳥になりたいな。他の動物なら鳥だけになりたい。驚みたいなのは嫌いだよ。鳩とか小さな鳥がいい。そういう、宇宙を駆けめぐるような魂、存在だ。

もう今度は、「芥種一粒」どころではなくなつてしまふ。クリスチャンというのは本当に雄大なんだよな、本来。ゲートという詩人がなぜ偉大かというのと、彼はそういう大自然と融合している魂なんだ。一神であろうと、汎神であろうと、多神であろうと、そんなことを観念的にゴタゴタ言つてないんだ、ゲートという人は。もうちゃんと、それぞれの場合と角度とからつかむことを知つている。

●絶対に棄てない

我々はその一粒の芥種、本当の原始力、靈的芥種になる。聖霊を宿せば、靈的芥種として皆さんは自由自在な人になる。ということは、要するに、キリストの中に入れば、この境地がだんだん開かれていく。だから、この

「エン・クリスト（キリストの中に）」

という言葉は大変な言葉なんだ。外側ではない。内側だ。全存在が内側に入っている。もう、相対的な自分なんていうものを問題にしないで、

「いや、相対でありダメであるからこそ凄いな。キリストはお前を棄てないぞ、

絶対に棄てないぞ」

と。これが、

「主われを愛す」

なんだ。「愛する」とは「棄てない」ということ。絶対に棄てない。

「私の証人あかしびととしてやるぞ」

と。みんな上からの力です。本当はこっち側からの決意でもない。始めはこっち側からやつてますよ。そのうちにくたびれてしまうからね、上からのものを受けとらないと。まあ、若い人に、一足飛びにそうなれとは私は言いません。けれども、私は水を割らずに本当のことだけを言っておく。いつ、ぶつ仆れるか分からないから。

「もう少し言っておけばよかった」



なんて(笑)。そうじゃない、毎回、私はもう言うだけのことは言っているわけだ。実際、いわゆる自分の信仰で人を律して、

「どうだ、ことうだ」

なんて言っている無教会は本当に気の毒だ。藤井先生もおったまげているのではないかな。藤井先生はかなり固かったからね。けれども、凄い先生でした。

●全身投入

我々は要するに天国体だ。キリストも天国体です。

「天国は近づきたり。お前の中にやって来たぞ」

と。あといろいろな譬え話がありますが、この芥種一粒——ブレイクの言う一粒の砂、一本の野草、掌に永遠を持つ、一瞬において永遠を生きる——そういう境地にいと、地道にあなた方のお仕事が本当の意味で展開していく。ただ夢見ているのではない。創造が、創造力が出てくる。何をしていても、何かしらんけれども、そこに本当の意味の展開が始まる。もちろん、技術や勉強をおろそかにせよと言っているのではない。その本当の展開をする根源力はいずこにありや、ということ言っている。その根源力がくれば、そのおのずからなるわざにおいて神の栄光を現している。全部、せしめられている。受け身の力です。

「それでは、力が来るまで黙っていようか」

なんて、そうではない。

「力をいただくためには全存在を投げ入れてごらん」

と始めつから言っている。これだけが秘訣なんです。もう、いつも申し上げている。何回申し上げても同じことですけれども。全身投入、祈り入る、叫び入ること。なんでも、入らなければダメだ、外側ではダメなんだ。

●霊子核

それでは、第十巻の「9月26日 一粒の芥種 (マタイ13)」のところを読んでおこうかな。

「^{からだね}31天国は一粒の芥種の如し、人これを取りてその畑に播くときは、^{よろず}32萬の種

よりも小さけれども、育ちては、樹となりて空の鳥きたり、其の枝に宿るほ

どなり。」(マタイ13・31~32)

「一粒の芥種 それは掌の中に置いて、さてどこにあるかといつよつに小さい。しかしこの小さい一粒の芥種は生命で充滿している。畑に播いたら、もうわからない。しかし、それが殻を破って根を張り、芽を吹き出し、どんどん大きくなって樹となり、しまいには空の鳥が巢を枝の間に作って宿るといふ。天国はそのように大きくなるのだ。我々一人びとりが芥種だとしても、魂の奥に聖霊という天来の種が宿らないと、



この譬話のようにはならない。聖霊は原始力を有^もっている。これがないと深く、広く、高く展開してゆくことはできない。いろいろな運命環境の変転を、波状に寄せては返す艱難を、突破する力は聖霊にある。苦しんでいる人、悲しんでいる人、病んでいる人、迷っている人、求めている人、そういう人々を福音の中に導入する力は聖霊の愛と力と智慧にある。私も聖霊を宿す芥種一粒となつてから、即ち1950年の晩秋天から聖霊が私に降つて以来、北は北海道から南は九州まで十二の召団が知らぬ間に形成された。いずれの召団も破れ幕屋であるがキリストの愛が抱いてくださる。ただ聖名を讃え奉る。

また我々一人ひとりが芥種一粒の如き原子核的な信に魂が凝集すれば不可能を知らぬ力にあずかる(マタイ17・20)。それを霊子核とでも言わんかな。」

我々もその霊子核を聖霊において頂いているわけです。

(参考)

矛盾に於ける魂の為楽

——ソネット——

1989年7月30日作

天海

キリストが今日私を恵み深くも樂園に招き給わば、

私は直ちに帰天しよう深き感謝を以て。

そは神の生命と愛を得んと求める人々のため、

かの十巻をみ霊に在つて書き終つたから。

之に反して私は世を去り得ない、

わが最後の課題を成し遂げるまでは。

日本が未だ著わしたことのなからう一つの詩を。

然りかかする矛盾が却つて私を魂の為楽の中に置く。

太陽は如何なる天候に際しても彼女らしく輝いている。

み霊に在つて私はどんな状況下でもこの山を登攀^{とうはん}する。

山頂を極めるには、嗚呼^{ああ}、幾星霜かかるのか！

星辰月華が幾夜もわが幕屋に微笑^{ほほえ}みかかる。

血と涙を以てこの詩を書き終えた暁^{あかつき}には、

これを十字架の主の御前に捧げよう。

(『エン・クリスト』40号 1989年10月 秋季号より)

